

総研大公開講演会

『「もの」と「こと」：痕跡から行為・認識へ』

日時：2024年6月8日（土）13:00～15:00 会場：国立歴史民俗博物館 講堂

「歴博の大学院」である総合研究大学院大学（総研大）先端学術院先端学術専攻 日本歴史研究コースが、教員と修了生による講演会を開催します。ふるってご参加ください。（入場無料）

「考古学は戦争や軍事組織をどのように認識するのか？」



藤原 哲 松戸市立博物館学芸員（総研大修了生）

歴史資料はそれぞれ得手不得手があります。考古学から戦争や軍事組織といった社会的な行為を復元するのは困難ですが、全く不可能でもありません。本報告では戦争や軍事組織を研究するための方法や事例を考えてみたいと思います。

<プロフィール>

大阪府岸和田出身。花園大学文学部卒業、総研大文化科学研究科日本歴史研究専攻修了。博士（文学）。古代の戦争や軍事組織を専門としています。松江市教育文化振興事業団、栃木県教育委員会、愛知県県民生活部文化芸術課などを経て、現在、松戸市立博物館主任学芸員。

<論文・著書>

『日本列島における戦争と国家の起源』同成社、2018年

「狩猟採集民の暴力と争い」（『日本考古学』第51号）2020年

「武人形埴輪と武装」（『季刊考古学』165号）2024年



「弥生・古墳時代の造形とひとのかかわり」

上野 祥史 国立歴史民俗博物館／総研大 准教授

弥生時代から古墳時代にかけての造形を取り上げ、その形や色、装飾や紋様に注目して、倭のひとびとの動きや心性とのかかわりを探ります。銅鐸や銅鏡、鉄製の刀剣や甲冑、貝や碧玉を用いた腕輪類、埴輪など、新たな造形や装飾の登場とその変容に注目し、認知の視点を交えて社会の複雑化や社会進化をとらえてみたいと思います。

<プロフィール>

1974年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程中退。文学修士。

国立歴史民俗博物館研究部准教授、総合研究大学院大学先端学術院日本歴史研究コース准教授（併任）。専門は東アジア考古学。

<論文・著書>

『東アジアと倭の眼でみた古墳時代』（編著、朝倉書店、2020年）

『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』（編著、六一書房、2022年）

「社会の変動と動物表象・造形の変化」（『心とアートの人類史』松本直子編、雄山閣、pp.73-84、2022年）

*二人の講演の後、中村耕作（歴博／総研大准教授）を交えて、鼎談を行ないます。